



恩納区の「笠口説」

(平成 21 年 7 月「御冠船踊り幻視」、県立芸大中庭仮設舞台)

は同じ琉歌で、しかも村踊りで御冠船踊りとされる

女踊りと同じ内容がありませんし、村踊りでは地域ごとに違う女踊りを伝承しています。内容的に近世の女踊りの歌詞に近い琉球舞踊からすれば、御冠船踊りを伝承するという村踊りに疑問をもつのは当然です。しかし村踊りの方では「芝居風の手の入らない」「『沖縄人物名鑑』名嘉真、246頁）、『研究所の踊りはきれいだいが手が浅い』（名護市山入端）と、琉球舞踊への批判と自負が根強くあります。近世琉球の王府（冠船）で、あるいは士族が踊っていた踊りをすべて御冠船踊りとするのが間違いのよう

す。

『八重山民謡誌』を著した喜舎場永珣の旧蔵資料に『躍番組』があります。最後の冠船となった1866年の翌年、八重山で国王と王妃の生年祝が行われ、八重山に滞在中の本部里之子親雲上が指導した若衆踊り、二才踊り、女踊りなどの歌詞と節が記され、その合計は56番に及びます。そこには朱書きで「此之句二而毛宜<sup>テ</sup>」など別の琉歌にしても良いことが書かれています。『躍番組』にはこのほかに、入羽の琉歌の一部「戻る」を「遊ぶ」に変えて出羽の歌としたり、同じ琉歌を別の節で歌ったり、扇や磨などの持ち物を替えたり、歌と節をそのままに若衆踊りを二才踊りにする例もみられます。特に女踊りの場合はテーマとなる琉歌、例えば「笠に散りとまる 春の花ごころ 袖に思ひとまれ 里が御肝」の前後の歌や節を変えていくつもの女笠踊りを作り出しています。

冠船ではこの踊りはこの琉歌をこの節で歌うというように固定されましたが、士族社会では踊りの作り替えの工夫、趣向を楽しんだということがこの『躍番組』から窺われます。ですから士族によって村に踊りが伝えられた時、その士族が知っていた踊りを教えることになり、地域ごとに違った女踊りが伝承

されることとなります。御冠船踊りを厳密に冠船で

踊られた踊りとすれば、村踊りに伝えられたのはこのような士族社会の踊りというのが正しいのです。村踊りで踊られる二才踊りはほとんどが琉球舞踊と同じ歌詞のために手が変わえられることがあります。恩納区の「笠口説」は琉球舞踊の演目ではありません。しかしこの二才踊りも『躍番組』にみられます。『躍番組』では若衆踊りになっていて、「げにや都の春の空」からはじまる揚口説の後に、かぎやで風節の「眺めてあかぬ 春の景色」、高離節の「沈や伽羅とほす お座敷に出ちて 踊るわが袖の 匂ひのしほらしや」、同じ節で「笠に音立てて 降たる夏雨も 今や打ち晴れて 太陽ど照ゆる」と歌われる三種がみえます。最後の高離節を湊くり節にして二才踊りにしたのが「笠口説」です。これも士族の工夫の結果です。

（『躍番組』は本田安次『南島探訪記』に収められ、恩納村文化情報センターでみられる）

板谷先生（沖縄県立芸術大学 名誉教授）には、恩納村史「芸能編」専門部会長を務めていただいております。